

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593190

研究課題名(和文) 日本における患者 看護師間の対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術の特徴

研究課題名(英文) Nursing skills unique to Japanese culture for managing interpersonal relationships between nurses and patients

研究代表者

田所 良之 (TADOKORO, YOSHIYUKI)

千葉大学・看護学研究科・助教

研究者番号：50372355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本での看護師経験をもち、かつ、イギリスにおいて看護師としての経験をもつ日本人看護師、自国など日本以外の国で看護師経験をもち、かつ、日本において看護師として経験をもつ外国人看護師、外国人看護師を受け入れた医療現場において指導にあたった日本人看護師、を対象に、個別あるいはグループでのインタビュー調査を行った。

インタビューの質的分析の結果、各群より日本人看護師が日本人の患者との対人援助関係の構築・促進・維持に用いている看護技術の特徴のカテゴリが抽出された。

研究成果の概要(英文)：The interview investigation to; (1)Japanese nurses who have experiences as nurse in both Japan and foreign country, (2)Foreign nurses who have experiences as nurse in both own country and Japan, and (3)Japanese nurses who are/were an instructor of foreign nurse in Japan; were performed in this study. Inductive and qualitative data analysis for interview data was applied to identify the nursing skills unique to Japanese nurse. The feature of nursing skills for building, promoting and maintaining the interpersonal relationships unique to Japanese culture, especially between Japanese patients and Japanese nurses, are shown.

研究分野：看護学

キーワード：対人援助関係 患者 看護師関係 看護技術 日本文化

1. 研究開始当初の背景

(1)日本における看護の理論や技術・教育は西洋看護の影響を強く受けているものの、特に日本の文化社会・医療組織において日本人患者 日本人看護師間で看護師が用いている対人援助技術には、言語化されにくい日本独自の文化が色濃く根付いており、それは十分に解明されていない。

(2)自国の看護技術の特徴に関連した海外の研究としては、多民族国家における少数民族の習慣的・宗教的な差異を背景として、それらの人々の文化的背景に応じた看護援助を提供する必要性を示唆した研究、スウェーデンにありフィンランド人が多く居住するナーシングホームにおけるフィンランド文化に配慮したケア(culturally congruent care)について報告している研究、文化的・言語的背景を配慮した移民 世への保健指導の研究などがみられる一方で、これらの研究は、自国で行われている看護技術の特徴に焦点を当てて明らかにしようとしている性質のものではない。

(3)看護における対人援助関係は、国内外共に精神科看護領域で語られることが多いが、精神科領域での対人援助関係は、精神疾患をもった対象者との治療的關係であり、それ自体かなり特殊なものである。

(4)山本ら(2007)は、海外で働く日本人看護師を対象とした調査を行い、日本・米国・英国・スウェーデン・タイ・韓国における在宅看護の比較を行った。

(5)田所ら(2007~2008)は、海外の医療専門職で日本の医療系大学院に在籍する在日外国人を対象としたフォーカスグループインタビューにより、日本の看護の対人援助関係に関する研究を試み、その結果、医療職であっても、看護師以外は、看護における対人援助関係について認知するのが困難であることを示した。

(6)田所ら(2007~2008)日本の大学院に在籍中の中国人看護師4名のデータ分析の結果、日本における対人援助関係の特徴として以下の6点を明らかにした； 専門職として仕事上の関係としてのはっきりとした関係性を構築する、 仕事上は、対応、言葉遣い、話の聞き出し方、会話等優しく患者と接する、関係性の維持を大事にして、患者の思いを尊重し、患者を傷つけないように配慮する、 患者がいなくても患者の存在そのものを大切にす、 言葉で表現されない患者のニーズを工夫して察する、 日本の文化の中にある曖昧さを理解した看護援助を行う。

(7)また、田所ら(2011)は、オーストラリ

アで看護師として看護実践を行っている日本人看護師 10名のインタビュー調査より、日本における対人援助関係構築のための5つの看護技術のカテゴリーを見出した。

(8)日本において用いられている対人援助関係に関する看護技術について、その文化の中でのみ実践している者が、その特性・特徴を技術として表現することは困難であり、それらに感受性の高い集団を対象にして調査する必要性が示唆された。

(9)以上より、日本の看護師が行っている対人援助関係に関する看護技術に感受性の高い対象者としては、以下の3群が考えられた。

日本での看護師経験をもつ海外在住の日本人看護師

日本と異なる、異文化圏の看護師としての規範・経験をもち、さらに、日本においても看護師として、あるいは看護に携わる学生・研究者としての経験を併せ持つ在日外国人看護師

の外国人看護師を指導した日本人看護師

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、日本における患者 看護師間の対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術の特徴を明らかにすることである。

(2)本研究により、日本の文化・社会・医療組織の中で日本人看護師 日本人患者間に暗黙知として存在し日本人看護師によって既に実践されているが、十分に解明されていない日本的な看護技術の特徴が明らかになり、それらを用いて、効果的な看護教育への貢献が可能になると考える。

3. 研究の方法

(1)対象

本研究での対象者は以下の通りである。

日本での看護師経験をもち、かつ、海外において看護師としての経験をもつ日本人看護師

自国など日本以外の国で看護師経験をもち、かつ、日本において看護師あるいは看護研修生(FTA/EPA等)として経験をもつ外国人看護師

FTA/EPAで外国人看護師を受け入れた医療現場において指導にあたった日本人看護師

(2)調査方法

ネットワークサンプリング法を用いて対象者を募集し、 ~ の群ごとに個別、あるいは、フォーカスグループでのインタビューを行う。インタビューの場所は、対象者の希

望と都合を考慮し、研究者の所属する大学、対象者の所属施設など、対象者と相談して決定した。インタビューは対象者の許可を得て、ICレコーダーで録音し、逐語録とする。

(3)分析方法

対象者の個別あるいはグループインタビューの内容を、質的帰納的に分析し、日本における患者・看護師間の対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術の特徴を導き出す。

4. 研究成果

(1)日本での看護師経験をもち、かつ、海外において看護師としての経験をもつ日本人看護師のインタビュー調査から得られた対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術

日本での看護師経験を有し、イギリスに在住し、イギリスで看護師としての経験をもつ、12名の対象者が得られた。対象者は全員が女性であり、年齢は30歳代中頃から40歳代後半であった。

日本での看護師経験は3年から8.5年(平均6.3年)、イギリスでの看護師経験は7年から12.8年(平均10.1年)であった。

12名の対象者の日本国内での臨床フィールドは内科・外科・脳外科・整形外科・精神科・産婦人科・小児科・ICU/PICU・手術室・クリニック等で、イギリスでの臨床経験フィールドは、外科・脳外科・小児外科・ナースングホーム・HDU・PICU・ホスピス・内視鏡室・リサーチナース・手術室等多岐にわたっていた。

インタビュー時間は、1名(1グループ)につき1回で、1回60~90分であった。

インタビューから日本人看護師が患者看護師間の対人援助関係を構築・促進・維持するための看護技術に関して抽出し、質的帰納的に分析を行った結果、以下の9の主要カテゴリーが得られた。カテゴリーを【】で示す。

【無理を聞いたり抜け道を作ったりする】

【へりくだって自分を下げることによって患者を安心させる】

【トラブルが起きないように場の雰囲気を整える】

【患者中心に考えて患者のタイプに合わせる】

【言葉の丁寧さを使い分ける】

【主張しすぎず、しかし、与えられたことは確実に行う】

【自己紹介・挨拶をしにいく】

【賢い人よりいい人になる】

【きめ細やかに気づき平等に接する】

各カテゴリーには、3~6のサブカテゴリーが含まれた。

(2) 自国など日本以外の国で看護師経験をもち、かつ、日本において看護師あるいは看護研修生(FTA/EPA等)として経験をもつ外国人看護師のインタビュー調査から得られた対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術

FTA/EPAによって来日したインドネシア人看護師のうち、日本語でのインタビューが可能な者を対象者候補として選定した。

研究者のネットワークから、西日本のある病院で勤務するインドネシア人看護師1名を対象者として得ることが出来た。

対象者は、インドネシアで約5年病院看護師として経験を有していた。来日してからは4年目となり、当該病院の慢性期病棟で看護師として働き始めて1年弱が経過したところであった。

インタビューは1回で、約110分であった。インタビューはとこところ英語をまじえながらもほとんどは日本語で行われた。

インタビューから、日本人看護師が患者看護師間の対人援助関係を構築・促進・維持するための看護技術に関して抽出し、質的帰納的に分析を行った結果には、以下の内容が含まれた。

【丁寧な言葉遣いで患者を尊重し患者の権利を示す】

【患者と近すぎず、遠すぎない関係性を作る】

【自らの感情をコントロールして患者に接する】

【お互いの関係を維持するために、言葉での表現を控える】

(3) (2)の外国人看護師を指導した日本人看護師のインタビュー調査から得られた対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術

FTA/EPAによって来日し、日本で看護師として就業しているインドネシア人看護師の指導担当者として、1名の看護師を対象者として得ることが出来た。

対象者は、看護師経験30年以上のベテラン看護師で、インドネシア人看護師の所属する病棟の管理者であった。

インタビューは1回で、約90分であった。
インタビューから、日本人看護師が患者
看護師間の対人援助関係を構築・促進・維持
するための看護技術に関して抽出し、質的帰
納的に分析を行った結果には、以下の内容が
含まれた。

【長いつきあいの中でも慣れ合いになりす
ぎずわきまえて接する】

【高齢患者を人生の先輩として尊敬して接
する】

【援助が受け入れられなくても、患者の過
去や現状を追体験して、多面的に理解しよう
とする】

【患者に対して出来ることを親身になって
考え続ける】

【落ち着いた雰囲気がかかわる】

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔学会発表〕(計1件)

田所良之：日本における患者 看護師間
の対人援助技術の特徴 - インドネシア人
看護師とその指導者のインタビューより、
第32回日本看護科学学会学術集会、2012
年11月30日～12月1日、東京国際フォ
ーラム(東京都千代田区)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

田所 良之 (TADOKORO YOSHIYUKI)
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号：50372355

(2)研究分担者

なし()
研究者番号：

(3)連携研究者

なし()
研究者番号：